

調査団体名	堀尾ハウス	団体代表者名	堀尾憲市
設立年	2003年	団体URL	<a href="http://www.japan-net.ne.jp/~nagayama/page/9041horio.html">http://www.japan-net.ne.jp/~nagayama/page/9041horio.html</a>
活動地域	岐阜、愛知、静岡	調査員	本田、杉野
取材日	2009/11/19	レポート作成者	杉野賢治

## 家は「命の箱」。百年耐える命の箱づくりと、山への還元

### <活動内容>

間伐材(ヒノキ、スギ、カラマツ)を徹底的に利用した家づくり。建築材料としての木の価値を、今までにない形で山主に還元することで、山そのものの価値の見直しを図る(通常の70~80倍の金銭的還元)。その一方で、百年を単位とした家づくりへのこだわりを独自の工法により実現。そのセールスポイントは耐久性と住み心地。

特徴は、ふんだんに使用(通常の木造住宅の1.5~2.5倍)した小径木から生産した3.5寸から4.0寸の柱材を複数本接着・ボルト接合して、一枚のパネル状構造物をつくること。間柱なしで、床も壁も屋根も梁も、全てこのパネルの組み合わせによって家を建てる画期的な工法(堀尾ハウスと呼ばれる)。施主からは「命の箱」への高い評価を受け、とりわけ、期待以上の「快適感」に対するうれしい声が増えていることを受けて、その科学的根拠を解明すべく、現在、各研究機関の協力のもと、そのメカニズムを調査中である。

### <会のモットー(何を大切にしているか)>

現在の使い捨てる思想による安易なものづくりをせず、耐用年数百年に及ぶ木材の正当な対価を山に還元する。また、時代の変化、住む人の感性を大切に、末代までも満足できる「リフォーム自在」な家づくりも同時に実現する。

### <設立から現在に至るまでに変化したこと>

ログハウスのイメージを求めて外観重視の施主が多いかと思いがちだが、実際に住まれた方々の予想以上の高い評価を頂き、圧倒的な質量の木材空間の良さが再認識されることで、より内部空間へのこだわりが強くなった。

### <連携している団体・専門家・自治体など>

恵那市、森林組合、名古屋工業大学、名古屋大学、信州大学、柚組(調査3-8)他

### <今までに行った調査・研究>

○パネル強度試験(名古屋工業大学) ○室温解析(信州大学) ○快適度調査(名古屋大学)

### <現在直面している課題>

これまでになかった独自の工法に対する法的な評価のシステムが確立されていないために、評価を受けることができない。これはひとえに、大量生産、大量消費の悪しき慣習の弊害である。CO<sub>2</sub>排出ゼロを目指した木材乾燥技術の確立が急務(ドーム型乾燥装置)。

### <今後やってみたいこと>

山の価値を適正な評価のもとに山に還元するためには、適正価格を維持しつつ、中間マージンを減らす必要がある。そのためには、大手企業ができないことをやらねばならない。最も望ましいのは、流域の材をできれば伐り出したそばからパネル加工し、流域で家を建てることである。今まではヒノキが多かったが、今後はスギでやってみたい。森林組合で、乾燥からパネルの加工まで行うのもいいし、ヘリコプターを使った搬出も有効だろう。その程度のコストを投じて、十分に対価を山に還元することは可能。

### <そのためにはどんな情報・人脈が必要か>

なんといっても大切なのは、山に直接携わっている人々とのつながり。実際に材を所有している人々、そしてそれを伐り出す人々、つまり山主さんたちや森林組合・森林ボランティアの人々との連携が必要。まずそれらの人々に山の価値を再認識してもらうこと、そして行動に移してもらうこと。そのための情報発信をしていきたい。そのためには理解あるNPO団体等とも協力していく必要がある。

＜オリジナルの質問＞	
質問内容:	今回見せていただいた家はかなり大きなもので、価格的にも高額だが、安価なものではないのか。
答え:	今回の家は中でも大きなもの。もちろん大きさは施主の希望次第でいかようにでもなる。しかし、2世帯、3世帯が将来的に住む可能性を考慮すると、余裕を持たせたほうがよいのでは。床下作業が自由な工法であるため、リフォームは非常に楽でコストも少なくてすむ。
質問内容:	流域との関わりは？
答え:	山を活かしていくためには、局地的な取り組みでは無理。川の流が途切れないのと同じで、山も一つ。そして山があるから川がある。山と川が一体である以上、流域の問題は山の問題でもある。

#### ＜その他、伝えたいこと＞

「他がやっていないことをやる」。堀尾氏のこの言葉がそのまま形になっている。それも堀尾氏の山に対する、そして住まいに対する造詣が見事に生かされた形で。さらに素晴らしいのは施主の反応である。木の良さと言ってしまえばそれまでだが、それを伝える手法・技法は見事である。

特筆すべきは、その経済効果である。施主の予算に応じた施工を徹底的に行う。中間マージンを減らしつつ(素材生産者から現場へ直接パネルを納入)、とにかく木材の価値を上げる。細くて弱い小径木を接合して組み合わせることにより、木材パネルとしては測定不能レベル(大学の試験装置)まで強度を上げることに成功した。また、使用する木材量としては、常識を遥かに超えている。暖房がなくても過ごせるくらいの遠赤外線を放出する体積と質量である。

堀尾氏が目指すところは、通常の評価では価値のない間伐材に価値を与えることにより、それが山主に戻される仕組み。お金が山に戻れば、山主は再び山を手入れする気になる。堀尾ハウスが普及すればするほど、山がよみがえるという図式だ。これは夢物語ではなく、現実味を帯びた壮大な計画である。



パネル作成風景



作業場



堀尾ハウス 施主宅訪問



総ヒノキの室内

